

は狙撃師團二百十七師、戦車五十個師、騎兵十九個師、山岳部隊九個師、民兵部隊二個師、總數二百九十七個師の外に落下傘部隊三個師團、歩兵部隊一個旅團、戦車部隊一個旅團この總兵力六百萬乃至七百萬である。十月末までの總戰果は擊滅兵力は四百師團に近く七百乃至八百萬に達するものと確信される。と云つてゐる。かやうに觀ると前記したる蘇聯の生產力と輸送

問題とを對照して蘇聯がモスクワ、レニングラード、ウクライナ、コーカシア等を喪失してウラル以東に退いた場合、例へ英米の物資援助があるも、これには自から運輸力其他に付いて限度があり、果して長期抗戰が維持出來得るか大なる疑問とするのであるが、今未だ現在の狀況に於てはこの冬季抗戰は依然として繼續して問題は來春雪解時期以後にあることを思はしめるのである。

小春の水戸近郊

苔

石

昭和十六年十一月九日、日曜を久しうぶりで下宿に迎へた水戸に住むやうになつて丁度百日を超えたことになる。

顔を洗つたのが朝の七時十分前、二階の窓を開け放して廊下に

停てば秋の陽ながらも心地よく肌を温ためる。空も可なりに晴れてゐる。飛行機が爆音を殘して蒼空を過ぎてゆく、隣りの屋根瓦

に虹が一匹日向ぼっこをしてゐる見てみると時々三尺位飛びあ

がつては又止まる。眞下の中庭には清楚な八ツ手の花が陽光をあ

びで咲いてゐる。その花には虹が二三匹止まつて反射的に花

の白さが目に映じてくる、虹は軽そうに線さまざまに飛んでは止り止つては飛んでゐる。長閑な小春風景ではある。

蟲飛んで日向まぶしや花八ツ手

こんな句を考へてゐると急に郊外散策の衝動に馳られる、朝食

もそこそこに護國神社參拜を志した。

下宿の主人から地圖で道順を教へて貰つて丹前を洋服に着替へ一散に飛び出す、裏通りから近道を抜け水戸驛西側の常磐線踏切を越えれば直ぐ平坦な田園になる、稻はすつかり刈りとられて水を

含んだ田面が黒く光つてゐる、稻架の稻を見つゝ美都里橋を右へ

折れて千波湖の堤へと出る堤は遊歩道となつてゐる。櫻並木がある

が、今はわくら葉が枝に残つてゐるにすぎないが春はさだめし美

事なものであらう。

近くの畦に年輩の夫婦が稻抜きをやつてゐる、風は強からず陽

差はよし如何にも温かそうである。堤の花芭^{ハナバ}に手を觸れば只ふ

んわりと感じる丈で持前の冷さを感じない水田の多い會津で育つ

た私には、收穫時の故郷の様がまざまざと目に浮んでくる。柿や

芋、牛肉等を携へて山に川に友だちと秋を樂しむだ、少年時代が

またなくなつかしい思ひ出となつてくる、あれこれと考へながら

堤の草むらを踏んでゐると氣持よい觸感が足を傳ふ、千波湖には

あるかなきかの小波をたたへてゐるその湖上に白帆を張つたヨツ

トが二隻泛んでゐる。小形のボートを漕いでゐる小學生もある。

そのヨツトの先をボートの先を鴨の小群が静かに泳いでゆくよく

見れば浮寝の鳥がそれもおそらく鴨であらう、遠くの方に無數に

ゐて闇夜に星を探るやうに次々と姿が見出される、汀には磯の石

を思はする程多くの鳴が濡れ羽を乾かしつゝ休んでゐる、秋にな

ると何處からともなく此の湖に集つて來るのだそつた。

稻架^{ハサ}の稻千波^{チシマ}の湖の靜かなる

小波や數へて餘る浮寝鴨

舟漕ぐや稍遠ざかる鴨の群

近よれば汀の鴨は沖へ翔つ

潮に低く翔ちは浮ぶ小鳴かな

護國神社參拜が第一の目的ではあるが、かれこれ十年の東京生

活で大自然と遠ざかり自然美に餓ゑて來た私にとつては、かうし

た静かな風景に接つして容易に立ち去り難い執着を感じるのであ

る。自然美に向ひ静かに考へることは自己反省を促すに一番いゝ

ことであると思ふ。己の情操を養ふ爲にはつとめて自然界に接す

ることを心がくべきであらう。

護國の英靈を祭るべき此の新なる護國神社の遷座祭は此の月の

六、七、八の三日間に亘りとり行はれたのであるが、時遇上京中

とて其の式典を拜し得なかつたことは甚だ殘念に思へたので、明

けて今日參拜を志したのだが同じ思の人達だらう線路向ふ的道路

を或は老をいたはり或は幼を助けつゝ、多數神社へと歩を運んで

ゐるのが見える、私と同じコースを辿つてゐる者も少くない陸前

濱街道の新道路に出づれば、眞新しい一の島居が老松の縁に和し

てくつきりと白く浮んで見える参道にも櫻並木が續いてゐる、徒

歩數丁一の島居の稍手前左側に三笠山にも比すべき小眞丸い丘が

ある。

稻田産の御影で出来た一の島居をくぐると同じ石の階がある、數へて十九段これと同じ階が續いて三段にして二の島居に達するそれより御影の鋪石を數十步にして拜殿となる、社は車をうけて

建つて在る總檜の白木造りで見るからに神々しい、周圍には赤松の古木が配置よく緑えてあるその樹間には今が見頃の紅葉が點綴して小春の空に照り映えてゐる。

参道を過ぎて社頭の紅葉かな

此の境内は水戸黄門即ち義公愛稱の櫻山公園の一角を爲してゐるのだ。禮拜を終一回顧すれば千波の湖が一望のうちに眼下に展開する。稍左の方常磐線を隔てゝ常磐公園の老杉が永久の緑をたたへてゐる。前方空高く軍用飛行機がしきりと飛んでゐる。英靈を祭るにはまさしく處である社の位置のよさ日本一と稱してゐるが、誇張の言葉とは思はない英靈以て冥すべきである。

これで水戸郊外新名所が一つ殖えたといふものだ。春秋の候老若男女の此の社に杖を曳く者少くなからう、そして永久に英靈を慰むるであらう。

秋晴や營み清き新宿居

英靈は鎌もり秋の空晴るる

横手境内には今し青年校の奉納相撲の眞最中だ、やがて國家の干城たるべき若者共の肉彈相撲つ様は實にも頗るしき限りではある。

秋晴の奉納相撲裏からず

牛さがりを紅葉が、一と枝二た枝と音なく静かに散り敷き氣温

はことの外温かい。

歸途人込を避けて刈田の中の畦を拾つて氣儘に歩を運べば、未だ枯れ切らぬ草むらに力なくはあるが小春の陽の光を浴びて生氣を取り戻した蝗がうごめいてゐた。用水堀の水溜にはメダカがびちびち泳いてゐるもの見受けられた。

水戸近郊は散策によろしい。近代の化學の文化の破壊力は此處まで手が及んでゐないのだ。野も山も未だに自然美を保つてゐる。

